

振り袖の持病

辻 憲男（文学部教授）

野崎まいりは、旧暦四月、寝屋川を船で、あるいは堤を歩いて行くのが習わしだった。陽気な落語や流行歌で知られたが、古今の人気はお染久松の人形芝居である。近松半二の『新版歌祭文』では、油屋の一人娘と丁稚（でっち）の許されぬ恋。お染の大店への嫁入りが決まり、久松は離別状を残して養家へ帰った。ところが、「お染は思い久松が、跡を慕うて野崎村、堤伝いに漸々と、梅を目あてに軒のつま」に訪ねて来て、許嫁と知らずお光に声をかける。「ちょっと逢わして下さんせ」。お光は戸口で、言葉も姿形も「見れば見るほど美しい」、さてはこれがお染と嫉妬して、「そんなお方はこちゃ知らぬ。よそを尋ねてみやしゃんせ」と追い返す。あとで久松に、「振り袖の美しい持病」とあてこすり、親の前で口げんかをする始末…。

だがお染の覚悟は出来ていた。久松の本心とて同じこと。お光の弾んだ心にも、彼らの一念は痛く響いた。二人の娘の見事な対照。断ち切れぬ愛執、行きづまった運命、作者はそれを「悪縁深き契りかや」と評した。

実説の事件があったのは大近松全盛の昔。『女殺油地獄』にも浮かれた屋形船と、あでやかな若妻の道中が描かれていた。「姉は九つ三人娘、抱く手・引く手に見返る人も、子持ちとは見ぬ花ざかり」。大阪の富商の御寮人様（ごりょんさん）と嬢様（とうさん）－昭和の谷崎潤一郎も汽車で姉妹のお供をし、自分が久松か丁稚であるような気がした。なつかしい芝居の土手の寝屋川は、「今もあそこを昔に変わらず流れているだろうか」。



「どこを向いても菜の花ざかり」…大東市の野崎観音・慈眼寺から。